

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その8）

2019年12月吉日

広島地区ミニバスケットボール連盟

副会長 大庭 浩 資

広島地区ミニバスケットボール連盟の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

9月22日の男子・古田会場を皮切りに、長期間に渡って行われた全国大会予選も無事終了しました。その間お世話になった、各会場の保護者の皆様をはじめ、各チーム保護者・指導者・役員の皆様に改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

そしていつもながらのことですが、予選で敗退したチームの指導者は、地区決勝大会の審判・コミッショナー・記録をはじめとする各種運営を行う。またその代わりに、地区決勝大会に進んだチームの指導者は、フレンドリー大会の運営を行う。このように指導者同士が、広島地区の子どもたちのために互いに助け合う関係は、他の競技団体に誇れるものではないでしょうか。この指導者が一致団結した組織としてのすばらしさを今後も継続しながら、バスケットボールを愛する小学生のために、お互い頑張っていきたいものです。

県大会で見事に優勝し、全国大会への切符を手にした、「女子 古田台ミニバスクラブ」「男子 伴東ミニバスクラブ」におかれましては、誠におめでとうございます。3月に行われる全国大会での健闘を、心よりお祈りいたします。

また残念ながら予選で敗れたチームも結果はどうあれ、これまで選手のみなが努力してきたという価値や評価は何ら変わるものではありません。各チームの練習や試合での頑張りに対して心からの拍手を送りたいと思います。

これからも、個人としてのまたチームとしての新たな目標に向かって、日々の練習を頑張っていたいただきたいと思います。「継続は力なり」です。

さて今回のお話しは、「褒める」についてです。今の時代、この「褒める」ということが重要視されています。そこで「褒める」についてコンパクトにまとめられたコラムがありましたので紹介します。

しかし、私個人的な考えでは、「褒める」ことばかりがあまりにも強調される今の教育や指導にはいささか疑問を持ちます。なぜなら、子育てや指導の基本技術は、昔も今も「叱る」と「褒める」のバランスが大切であり、暴力的な「叱り方」でなければ、子どもは両方を経験しながら育つと思うからです。

二宮尊徳先生も「可愛くば、五つ数えて、三つ褒め、二つ叱って、良き人となせ」と語られています。これは「子どもに対して5つの対象を見つけ出し、その3つを褒め、2つを叱る。この配分によって人は良い人材に育つ」という意味です。でもこの考えは今の時代には合っていないのでしょうか？

さて皆様は、どのようにお考えですか。

「褒める」 ～三つの方法を使い分けて～

日本コーチ協会専務理事
桜井 一紀 氏

子どもを褒めることの重要性が指摘されている。確かに褒められることは子どもにとっては大きな喜びであり、前向きに取り組む力を生む。

コーチングでは、褒める方法を「Iメッセージ」「YOUメッセージ」「WEメッセージ」の三つに分けている。

たとえば、子どもが掃除を手伝ったとき、「家をきれいにしてくれて、パパは嬉しいよ。」と自分の感情を伝えるのがIメッセージ。YOUメッセージは、「自分から掃除をするなんて、お前はえらいな。」といった、どちらかという評価的な褒め方。WEメッセージは、「家がきれいになって家族みんなが気持ちよく過ごせるよ。」などという「わたしたち」を主語にする方法だ。

どの褒め方が心に響くかは、タイミングや場所、子どもの性格によってさまざま。でも、褒められればやる気が増し、自発的な行動に結びつきやすいことは確かだ。

ただ、「褒め」はプレッシャーにもつながりやすいことに注意を払う必要がある。テストで満点を取った子どもが両親から褒められているときのことを考えてみよう。そこで子どもが喜びだけを感じるならいいのだが、次回も満点を取ることに無言の期待を感じると、褒めれば褒めるほどプレッシャーを与えてしまうことになる。

コーチングは、相手のために行う戦略的なコミュニケーションだ。子どもにとってよい親（指導者）であるという役割を意識して、テストの点数に関わらず常に「あなたへの愛情は変わらない」というメッセージを出し続けてほしい。

その気持ちは、叱るときには一層重要になる。決して感情にまかせて怒るのではなく、子ども自身が納得し、悪かったことに気付くことができるよう、焦点を出来事に絞って叱ってほしい。

それでも、もし、感情にまかせて「だからだめなんだ」「いつもだらしがない」などと人格が傷つくようなことを言ってしまったら、きちんと謝ることが何より大切だ。

コミュニケーションの間違いは、コミュニケーションで修正できる。その習慣も身に付けておきたい。